

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	小川典子
論文題目	現代日本語指示詞の認知言語学的研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、認知言語学の観点から、日本語の指示詞（コ系、ソ系、ア系の指示詞）の意味機能と語用論的機能を分析した理論的・実証的研究である。全体は、8章から成る。 第1章では、本論文における指示詞の分析の枠組みとなる認知言語学の基本概念と本研究の構成を明らかにしている。 第2章では、現代日本語の指示詞の先行研究を概観するとともに、先行研究の次の問題を指摘している：先行研究では、(i) 指示詞のひとつの用法を説明し、それを別の用法に対応付けて説明する研究手法が採られることが多く、複数の用法を統一的に説明できていない。(ii) コソア系の指示詞は均等に分布しているわけではなく、用法上の偏りが見られるが、従来の研究ではこの偏りに関する説明は与えられていない。(iii) 指示詞の選択を説明・予測するモデルが説明対象とする範囲が明示されていない。以上の先行研究の問題を指摘したうえで、本章では、これらの問題を解決する本研究の立場と方向性を示している。 第3章では、共同注視を指示詞の機能の認知的基盤として位置づけ、指示詞の選択を説明するモデルとして2層モデルを提示している。このモデルは、指示詞の用法を現場指示と観念指示（従来の文脈指示と記憶指示を含む）に分離しつつも、共通の原理でその全体像を説明するモデルである。このモデルは〈知覚の容易さ〉と〈顕在性〉という二つの認知的要因に基づき、コソア系の指示詞の選択を説明するモデルとして提案されている。指示詞の選択の説明を試みる従来のモデルと本論文の2層モデルの最も重要な違いは、2層モデルでは、現場指示と観念指示とで優先される「知覚の容易さ」と「顕在性」の層の選択順序を逆にしている点にある。 第4章では、前章で提案した2層モデルに基づいて、コソア系の指示詞の使用に関する記述と説明を試みている。本章では、「聞き手領域指示のソ」は、話し手と聞き手の非対称性が指示物の〈顕在性〉を決定する際の指標として利用できる場合、「中称のソ」は非対称性が指示物の〈顕在性〉を決定する指標として機能しない場合の選択として予測可能である点を明らかにしている。次はア系である。従来の研究では、ア系は〈遠距離〉の指示に適用するとされているが、本章では、この〈遠距離〉に関わる要因は〈知覚の容易さ〉を左右する要因として再規定されている。最後はコ系である。これまでの研究では、コ系は現場指示的であるとされているが、本研究で提案した2層モデルでは、現場指示・観念指示のいずれの用法でも、コ系がソ系とア系を結ぶ軸となっており、現場指示・観念指示の間での差異がソ系・ア系に比べて小さい点が自然に予測される。 ここまでの章では、日本語の典型的なコソア系の指示詞（「これ／それ／あれ」の指示詞）の考察が中心となっている。これに対し、第5章～第7章では、これまでの日本語の指示詞の研究では等閑視され、周辺的な指示詞の用法として扱われていた指示詞を含む程度副詞、指示詞を含む人称詞、指示詞を含む縮約表現の分析を試みている。 第5章では、指示詞を含む程度副詞（「こんなに／そんなに／あんなに」）の記述・分析を試みている。その結果、「こんなに」は現場指示の用法が多いのに対し、「そんなに」、「あ			

んなに」は観念指示用法で使用される場合が多い事実を明らかにしている。さらに本章では、指示性の喪失が見られる「そんなに～ない」／「あんまり～ない」を比較し、前者が非主観的な基準（間主観的スキーマ）を参照するのに対し、後者は主観的な基準（主観的スキーマ）を参照する事実を明らかにしている。主観的スキーマは、個人の経験に基づいて形成されていく比較的安定したものである一方、間主観的スキーマは、他者の主観に対する理解をはじめとして、より多くの推論や経験を必要とする。この点は、大人に比べて十分な経験のない子どもの発話において「そんなに～ない」の使用が自然となる場面が極めて限られていることから裏づけられる。さらに、「そんなに～ない」が間主観的スキーマを参照することは、聞き手という他者の存在に大きく影響を受けるというソ系指示詞の性質からの自然な帰結である点も明らかにしている。

第6章では、指示詞を含む人称詞（「こいつ／そいつ／あいつ」）における指示対象の分布の実態を広範なコーパス調査に基づいて明らかにしている。基本的に人間を指示する人称詞である「こいつ／そいつ／あいつ」が、人間以外の対象も指示し得ることは先行研究においても指摘されているが、本章ではコーパスを用いて網羅的な調査を行い、実際の分布を明示的な形で明らかにしている。その結果、次の事実が明らかになった：(i) 人称詞の「こいつ」、「そいつ」が「人間」以外も広く指示対象とするのに対し、人称詞の「あいつ」は指示対象がほぼ「人間」に限定されている。(ii) 人称詞の「こいつ／そいつ／あいつ」に複数化接尾辞が付いた場合、指示対象が基本的に「人間」に限定される。(iii) 人称詞の「こいつ」、「そいつ」における非具体的対象への指示対象の拡大は観念指示において顕著に認められる一方、人称詞の「あいつ」に関してはそのような傾向は認められない。さらに本章では、以上の事実の中でも特に興味深い人称詞（「あいつ」）の指示対象がほぼ「人間」に限定される事実に関し考察を行い、このア系の人称名詞の指示性の制約は、基本的に知覚の困難な対象を指示するア系の指示詞の特徴に由来する点を明らかにしている。

第7章では、指示詞を含む縮約表現（「こりゃ／そりゃ／ありゃ」）の記述と分析を試みている。本章では、基本的にこの種の縮約表現は「レ形指示詞＋助詞は」から成る表現（「これは／それは／あれは」）の縮約形であるが、単なる音韻変化（あるいはスタイルやレジスターの違い）に留まるものではなく、原形の「これは／それは／あれは」とは異なる意味機能を持つ点を指摘している。さらに、「こりゃ／そりゃ／ありゃ」が述部の表す事態の参与者になる用法（補足語用法）では、その原形とは異なり、述部に話者の評価の表出が必要であるという制約が課され、縮約により意味の主観化が見られる。さらに、この補足語用法の他に、述部の表す事態の参与者になっていない用法（談話標識の用法）が「そりゃ」にのみ観察されている。本章では、この「そりゃ」の談話標識の用法に焦点を当てて詳細な分析を行った結果、「そりゃ」は、その後続内容が「そりゃ」の発話時点で既に存在する想定と一致することを聞き手に伝えると同時に、その後続内容が当然帰結されるような根拠の存在を喚起する機能がある点を明らかにしている。また本章では、この談話標識の用法は、話し手の態度や視点を表示する表現であり、補足語用法と比べてより主観的な表現であることを指摘している。

第8章では、理論・実証の双方の観点から見た本研究の意義と今後の指示詞の研究の一般的な展望について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、認知言語学の枠組みに基づく日本語のコソア系の指示詞の理論的・実証的研究である。

本論文の指示詞の研究一般に関する理論的貢献としては、以下の諸点が挙げられる。まず本論文では、〈話し手〉〈聞き手〉〈対象〉から成る「共同注意」(三項関係)の視点を導入することにより、〈話し手〉と〈対象〉という二項関係的な分析に偏った指示詞の従来の研究に対し、相互行為的な側面の重要性を明らかにしている。本論文では、この相互行為的な視点から、従来の分析では統一的に説明することができず、指示詞研究の最大の争点となっていた「聞き手領域指示のソ」と「近くも遠くもない対象を指示する中称のソ」を、指示を行う際の指標として、話し手と聞き手の非対称性が利用できる場合と利用できない場合の違いとして説明している点に独創性が認められる。

本論文では、話し手と聞き手の共同注視の能力を指示詞の機能の認知的基盤として位置づけ、指示詞の選択を説明するモデルとして2層モデルを提示している。このモデルは、指示詞の用法を現場指示と観念指示(従来の文脈指示と記憶指示を含む)に分離しつつも、共通の原理でその指示詞に関わる言語現象を説明するモデルである。本論文は、このモデルに〈知覚の容易さ〉と〈顕在性〉という二つの認知的要因を2層の説明項として組み込み、コソア系の指示詞の選択のメカニズムを一般的に説明している。このモデルは、特にコソア系の指示詞の使用に関する以下の事実の説明を可能とする点に、その独創性が認められる：(i)「聞き手領域指示のソ」は、話し手と聞き手の非対称性が指示物の〈顕在性〉を決定する際の指標として利用できる場合、「中称のソ」は非対称性が指示物の〈顕在性〉を決定する指標として機能しない場合の選択として予測可能である。(ii)従来の研究では、ア系は〈遠距離〉の指示に適用するとされているが、この〈遠距離〉に関わる要因は〈知覚の容易さ〉を左右する要因として再規定される。(iii)これまでの研究では、コ系は現場指示的であるとされているが、本研究で提案されている2層モデルでは、現場指示・観念指示のいずれの用法でも、コ系がソ系とア系を結ぶ軸となっており、現場指示・観念指示の間での差異がソ系・ア系に比べて小さい点が自然に予測される。本論文の2層モデルは、以上の点で説明力、予測力のあるモデルとして評価できる。

従来の指示詞の研究の大半は、日本語の典型的なコソア系の指示詞(「これ／それ／あれ」の指示詞)の考察が中心となっている。これに対し、本論文では、これまでの日本語の指示詞の研究では等閑視され、周辺的な指示詞の用法として扱われていた指示詞を含む程度副詞(「こんなに／そんなに／あんなに」)、指示詞を含む人称詞(「こいつ／そいつ／あいつ」)、指示詞を含む縮約表現(「こりゃ／そりゃ／ありゃ」)等の綿密な分析を試みている。これまでの認知言語学の研究では、文の構成要素の中核を成す典型的な文法カテゴリーとしての実質名詞や動詞の典型事例とこれに基づく拡張事例の研究は広範になされているが、文法カテゴリーの特殊例として位置づけられる指示機能を担う名詞類の典型例と周辺例の認知的な分析はなされていない。本論文の以上の周辺的指示詞の拡張事例の綿密な分析は、日常言語の周辺カテ

ゴリーの意味機能、文法機能、等の記述・分析を行うための一つの検証の場を与える研究として重要な意味を持つと言える。

本論文の指示詞の研究は、近年、認知言語学の研究において注目されている文法化、意味の漂白化、話し手と聞き手の間主観性、等の問題の解明のためのケース・スタディとしても重要な知見を提供する。例えば、本研究で分析されたコソア系の指示詞を含む縮約表現は、縮約されていない元のコソア系の指示表現と同じ指示性を持つ表現ではなく、文法化のプロセスを経てその指示性が漂白化している。さらに、このコソア系の指示詞を含む縮約表現は、縮約されていない元のコソア系の指示表現と異なり、その機能がテキスト文脈における談話標識的なマーカーとしての主観性を伴う表現として変容している。この種の事実は、日常言語の慣用化のメカニズム、意味変化のメカニズムの解明に重要な知見を提供する。これまでの認知言語学の研究では、本研究に見られるような指示詞に関わる言語現象の慣用化と意味変化の考察はなされていない。この点で、以上のコソア系の指示詞を含む縮約表現の研究は重要な意味を持つ。

本論文の指示詞に関する言語現象の記述は、成人の指示詞の使用の諸側面に関する記述であり、言語習得の段階における指示詞の使用を記述したものではないが、指示詞の問題は、言語習得と認知発達の問題にも密接に関わり切り離すことのできないものである。発達心理学の観点からみた日本語の指示詞の研究では、言語習得の段階において、ソ系指示詞が最も遅く習得され、観念指示よりも現場指示が先に習得される事実が指摘されている。

本論文で提示した〈知覚の容易さ〉と〈顕在性〉の認知的な基盤に基づく2層モデルは、コ系、ア系の指示詞の認知に比べ、ソ系の指示詞の認知の方が困難であるという事実を予測する。しかしこの種の予測は、共時的な観点から見た大人の日本語指示詞に関する予測であり、言語習得の発達段階に関わる予測ではない。共時的な観点から見たコソア系の指示詞の認知の難易度と言語発達の観点からみたコソア系の指示詞の習得順序の相互関係の検証は、今後の研究課題として残される。

また本論文で考察した指示詞の問題は、言語学の関連分野の研究（特に、共同注視に関わる心の理論の研究、指差し・手差しに関わる手話言語の指示性の研究、等）にも密接に関係している。本論文の目的は、言語現象としての指示詞の考察にあるが、本研究は、これらの言語学の関連分野の研究にも重要な知見を提供することが期待される。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等に関わる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成25年2月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降